仏教讃歌の演奏についての再考
～日本・ドイツ公演を経て～
Gedanken über die Aufführungspraxis Buddhistischer Hymnen
—Erfahrungen aus Konzerten in Deutschland und Japan—

ガハプカ　奈美

はじめに

本稿は平成23年度より行ってきた仏教讃歌のドイツ語訳と解説作成および原語演奏によるものを取りまとめ、新たに歴史的背景、宗教観などの視点を持ち検討を加えたものである。

今日、日本の仏教は世界でも注目を浴び、仏教を体験するために来日する外国人も少なくない。一方で、キリスト教の讃美歌とその目的を同じくしているであろう仏教讃歌が日本人であっても広く知られているとは言い難い事実に対し、筆者は、演奏者としていかに演奏していくべきか探ってきた。また、国際化が加速している中で仏教の心を歌っている仏教讃歌を国際交流の懸け橋に出来ないか検討した。その過程ではいずれの讃歌も大きくは広い一般普及を考えた布教活動の一環であったと考えられるが、その成り立ちや発展の仕方には大きな違いが見られた。

そこで本稿では、仏教讃歌と讃美歌（ドイツ語讃美歌）の歴史を概観し、その成り立ちや発展の仕方について歌詞と旋律を通して再考する。

本研究の目的は、仏教讃歌のドイツ語訳を作成し、ドイツ語圏での演奏を可能とし、仏教讃歌を媒体として国際的な交流を可能とするものである。その事により、仏教讃歌の更なる普及と広い理解を促すものである。

１．仏教讃歌について

１）日本人の宗教観

まず、仏教讃歌の詩をドイツ語に訳すにあたり、仏教讃歌自体の歴史の前に、どのような環境的背景があって歌詞にある言葉が生まれたのかを明確にするために、日本人の宗教観について述べたい。

日本において、「宗教」というと、その言葉自体に抵抗を示す場合が多い。2008年に行われた読売新聞による「日本人の宗教観」（読売新聞,2008）についてのアンケートによると、

・あなたは何か宗教を信じていますか？　という問いに対して、（信じている/26.1%　信じてない/71.9%）

・あなたは自然の中に人間の力を超えた何かを感じることがありますか？ という問いに対して、（ある/56.3%　ない/39.2%）

しかし、一方で、

・心安らぐ「スピリチュアル」に関心が集まっているが、あなたはこうした「スピリチュアル」にひかれますか？という問いに対しては、（ひかれる/20.6%　ひかれない/75.4%）

人間の力を超えた力は感じているが、それは「スピリチュアル」な世界のものではない、と感じている結果がはっきりと出ている。

このような結果は我々日本人が見ると、「そんなものであろう」あるいは「自分もそうだ」など同調を得られることが多いであろうと考えるが、宗教の根付いている国の人々にとっては「不思議である」と感じるのは言うまでもない。

さて、そもそも「宗教」という言葉はどのようにして日本語となったのか考えたい。「宗教」という語は、日本語として元々無く、明治維新での日本の近代化に合わせて西洋の概念に対して訳語として造り出された。religion に対す

る訳語として1873年頃から宗教学という学問の成立と共に一般的に定着した。（山折・長田, 1998）それぞれの言葉に対するイメージは、その言葉の成立と当時の政治、社会情勢が大きく影響をしている。明治維新以降から現在にいたるまで、日本には、絶えず外（外国）から吹き込まれてくる文化を様々な形に融合して発展させてきた。このことは、宗教観に限らず家族観、生死観、葬送儀礼、祈禱など様々な形で日本人の感覚として根付かせていった。（吉田, 1998）ともいわれ、さらに日本は島国であるため、他宗教を信仰する外国によって言語や宗教を強要されることはなかった。

また、我々が日常的に慣習として行っている「お盆」、「お彼岸」など儒教が、日本の民衆レベルに根付いているとも言える前述のアンケートにおいても、

・お盆やお彼岸にお墓参りをする。（する/78.3%）や、正月に初詣に行く。（行く/73.1%）
・あなたは、自分の先祖を敬う気持ちを持っていますか。（持っている/94%）

など、儒教という宗教性が全く意識されないまでに日本人の感覚に根付き、文化として慣習化されている。

このように文化の違いを文化形態、人々の感覚が全く違う、また、言語の成り立ちも違うドイツ語圏で演奏をするにあたり、訳を作成すること、解説をすることは、必須であるが、その作業においては単に日本語をドイツ語に直すというだけでは、役割を果たせないと強く感じる。

日本における仏教の受容はこれまで述べてきたように「宗教」としてというよりは、日本を、あるいは日本人を象徴するような慣習的なものが少なくない。

次に訳を作成するにあたって、考えなくてはならないのは、仏教とキリスト教における「死」に対する救済の考え方である。

まず、日本人の救済観は、「死者の魂は仏陀の慈悲により浄土へ救われ、その魂は、仏になるのだ」という考え方であろう。おそらく、本来の仏教から考えるとそうではあるまいが、一般的にはそのようなイメージが広がっている。

インド仏教の「無我」の思想が日本に伝わる際に、「日本人の現世志向的特徴は「無我」というような極度に形而上学的な観念を受け付けなかった。むしろそういう「無我」の観念に代わって登場したのが、浄らかな精神状態を追求する「無心」「無私」の考え方であった。観念のレベルでは無我を説きつつも、日常的な意識や感覚のレベルでは心にわだかまりのない「無心」の状態が追求され、それが信仰心や宗教心の基礎を作るものと考えられるようになったのである。古くから神道では、「清き明き心」ということが説かれていたが、それが仏教の「心浄ければ一切浄い」という思想と共鳴して、日本人の宗教意識の下地を作っていった。「自我」の独立や否定を目指すよりも、「心」の昇華や浄化をよりいっそう重視するようになった」(山折, 1991)

などと言われるように「宗教」という一つの言葉だけでも様々な解釈のもと成り立っている。さらに、その内容となるととても複雑にその国の風土、環境、感性が同時に働き展開、発展を遂げる。これらは否定すべきものではなく、前々稿、前稿そして本稿のように他文化を持つ国の言語に訳を作成したり、それらを説明解説したりするにあたって、自国および他国の生活習慣や人々の感覚を十分に含みつつ行わなければならないことを確認した。

次に、働き方や休暇のあり方などにおいて良く日本と外国間で比較されるのが家族観ではないだろうか、宗教の在り方と家族の在り方はとても深い関係にあると考える。

なぜなら、「代々家を継いでいくこと」、「家庭内での教育」など様々な「家族」の考え方において大いに左右されるからである。私たちの記憶に新しい経験で日本人の家族観を知ることが出来る。私たち日本人は、4年前の大震災を経験して、精神的変化をもたらした。これまで「あたりまえ」であったことが「あたりまえ」ではなくなり、それらは、「ありがたい」事へと変化していった。しかし宗教観においては、日本人の精神的特性とも言える「何があっても変わらず」と言う考え方を貫き、このことは諸外国からみると驚異にうつったようだ。その考え方には、実は「いのち」 に対する考え方が大きく関わっている。

これまで日本人は、「無私」－自然の流れに身を任せること、あるいは自然と融合することなどを大切にしてきた。そして、それらを文学や芸術に置き換えて表現してきた。筆者はその近現代風な表現の方法が仏教讃歌にあたるのではないかと考えている。

仏教讃歌は、楽譜―五線紙としての現在の形で残されるようになったのは、明治期である。音楽の歴史で考えるならば仏教讃歌は大変新しいものである。

しかし、歌として仏教を語るものはその以前から存在しており、仏教讃歌の歌詞に残っているものも少なくない。その歌詞においては、「和讃」を使ったものが多くある。「和讃」とは、仏、菩薩、教法、先徳などを和語で讃嘆した歌であるが、平安時代から江戸時代にかけて多く行われたものである。また現在「和讃」の中で一般的に知られている句は、親鸞の次の句である。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

本和讃は、七五調、四句一章の構成になっており、親鸞が、日本最古の和歌集「万葉集」（759年成立）で日本人のリズムとして確立した「万葉リズム」と言われるリズム　―　七五調を用いて、一般人が読み解くには難解である「教行信証」（漢文）を和文で表した。このことによって一般的にも広まっていったといっても過言ではない。

このように最初は詩のみで普及していたものに徐々に旋律をつけ、旋律のみであったものに、明治期をむかえ日本人も渡欧が可能となったことなどでヨーロッパの楽譜に書き残す技法を持ち帰り詩と旋律そして和音伴奏などを楽譜にして、一般的にもまた後世の我々もこうして目にし、仏教讃歌として歌うことが可能となった。

2）訳詞を作成するに当たっての問題点と訳詩

さて、日本語の歌詞をドイツ語に翻訳をするにあたり、前述のように 文化の違い、言語の成り立ちの違いなど、一奏者としての立場を踏まえてどのように考えて訳詩を作成し、解説を行ったか前論文にも記したが、更に具体的に記したい。

第１曲目として〈ありがとう〉を挙げたい。本曲は、1976年に作曲された。作詞は高田敏子で代表作は、『月曜日の詩集』などがある。作曲は音楽の教科書などにも出てくる中田喜直である。本曲に対しての訳は次のように表した。

ありがとう	Dank
みほとけの　恵みを受けて	Von Buddhas Segen
こころに満ちる　ありがとう	Ist mein Herz voll — habe Dank!
ありがとう　花よ	Ihr Blumen, habt Dank!
今日の日を明るく咲いて	Ihr blütet den Tag heute in hellen
ありがとう	Farben — habt Dank!
小鳥よ　元気な歌を	Ihr Vöglein, ihr ließet frohe Lieder
聴かせてくれて　ありがとう	erklingen — habt Dank!
ありがとう	Habt Dank!
日々の暮らしにありがとう	Tag für Tag im Leben
の　言葉　添えて	reihen sich die Dankesworte.
御仏の　笑みに照らされ	Von Buddhas lichtem Lächeln
こころに満ちる　ありがとう	Ist mein Herz voll — habe Dank!
ありがとう　友よ	Ihr Freunde, habt Dank!
今日の日を共に過ごして	Den Tag heute mit euch zu teilen — habt
ありがとう	Dank!
ひかりよ　私の道を照らしてくれて	Daß du, Licht, mir den Weg erhellst —

ありがとう	habe Dank!
ありがとう	Habt Dank,
日々のふれあいありがとう	euch alle Tag für Tag zu treffen!
の　言葉　ささげて	Worte des Danks, Buddha dargebracht.

まず、日本語で「ありがとう」は日常的に使う生きた言葉である。対してドイツ語「Dank」は、Dank だけでは生きた言葉として使用しない。日本語の生きた「ありがとう」に対する言葉は本来「Danke」もしくは「Dankeschön」である、また「Vilen Dank」と使うが、これは決して「Dank」のみで使用するものではない。楽曲としての題目として理解を促すには「Dank」であり、これを日本語に逆に訳すと、「感謝」が当てはまる。また、１番の曲中に「ありがとう」という歌詞が６回登場する（ただし、ここでは波線と下線の５回のありがとうについて述べる）これらは日本語においては、「わたくし」がすべてに感謝するという立場は変わらないが、ドイツ語では、波線と下線のように「ありがとう」が作用するものによって「habe」、「habt」と区別せねばならない。しかし、日本語の歌詞を解釈しようとすると、おそらく日本人は、前節で述べたように、単純に「咲いている花に感謝」ではなく、「花を咲かせてくださっている仏に感謝」と捉えて詩を読みとったり、演奏したりするであろう。このように、大きく「宗教」の考えの在り方について考えねばならなかった。

第２曲目は、〈生きる〉である。この曲は、1970年に浄土真宗本願寺派の大阪教区仏教婦人会連盟大会の記念合唱曲として作られた。作詞は中川静村代表作に詩集『そよ風の中の念仏』などがある。作曲は森正隆。森は大阪の出身で仏教讃歌の作曲も多く残している。

生きる		Leben
1．生かされて	生きてきた	1. Mit Leben beschenkt, habe ich gelebt.
生かされて	生きている	Mit Leben beschenkt, lebe ich heute.
生かされて	生きていこうと	Mit Leben beschenkt, werde ich weiter leben －
手をあわす	南無阿弥陀仏	und falt‘ die Hände NAMU(O) AMIDA BUTSU.
2．このままの	わがいのち	2. So wie es ist, mein Leben,
このままの	わがこころ	so wie es ist, mein Herz －
このままに	たのみまいらせ	so wie ich nun bin, bitte ich Dich darum:
ひたすらに	生きなん今日も	mit allen Sinnen will ich auch heute leben.
3．あなかしこ	みほとけと	3. Oh, wie herrlich! zwischen Dir, Buddha,
あなかしこ	このわれと	und－oh, wie herrlich! － zwischen mir
結ばるる	このとうとさに	wird geschlossen der kostbare Bund.
涙ぐむ	いのちの不思議	Tränen steigen auf über dies Wunder im Leben.

本曲において題名「生きる」はドイツ語にして「Leben」で良くあった訳があてられたが、詩の内容を訳しようとすると、先にも述べたが、「宗教感」や

「文化」などの大きな違いをどのように工夫をして埋めていくか訳詩作成が、大変困難な詩であった。

例えば日本人がこの詞を読むと、大多数の人は「そうだなぁ私たちは生かされているんだな」と感じることが出来る。しかし、ドイツ語にはまず「生かされている」という言葉自体がない。先に述べたように明治期に日本語「宗教」=「religion」としたことと似たような問題が浮上した。そこで、日本語の詩にはないが、言葉を補って少しでも日本語詩の意味に近づけるようにした。ドイツ語に訳したものを直訳すると次のようになる。

生きる

1．いのちが贈られたことによって　こうして私は生きてきた。
　いのちが贈られたことによって　今日も私は生きている。
　いのちが贈られたことによって　これからも生きていこうとする
　そして手を合わせて祈ろう　南無阿弥陀仏　と

2．あるがままに　私のいのちを
　あるがままに　私の心を
　さあ　あるがままに　私はあなたにお願いしたい
　すべての感覚でもって　今日も私は生きていく

3．なんと素晴らしい　あなた、仏さまよ
　なんと素晴らしい　わたくし
　あなたとわたくしがまるごと　尊く結びつきを感じる事よ
　涙がこみ上げてくる　いのちの奇跡よ

というように、もとの日本語詞と違っているが、ドイツ語に訳するにあたり宗教の在り方や、考え方また、ドイツ語の文法などを加味し、このように表した。

第３曲目は〈聖夜〉である。この曲は、1927年に九條武子が詩を書き13年後の1940年に中山晋平が作曲したものである。

聖夜		Heilige Nacht
１．星の夜空の	うつくしさ	1. Der Sternennächte Schönheit −
たれかは知るや	天のなぞ	wer wird sie schon kennen, des Himmels Rätsel
無数のひとみ	輝けば	Ungezählte Augen, die erglänzen.
歓喜になごむ	わがこころ	Im Staunen wird uns Friede in unser'n Herzen.
２．ガンジス河の	真砂より	2. An den Sandufern des Ganges
あまたおわする	ほとけたち	weilen in großer Zahl die Buddhas,
夜ひるつねに	守らすと	und bei Tag und Nacht geben sie uns Schutz.
聞くになごめる	わがこころ	Als es mein Herz erfuhr, fand es seinen Frieden.

本曲においては、詩を訳する事ではなく、題目の持つ言葉そのもののイメージを持たずに本曲に向き合ってもらうことが一番困難であった。キリスト教を社会背景に強く持つヨーロッパの人にとって「聖夜」−「Heilige Nacht」はいわゆるキリスト教最大の行事でもあり、ヨーロッパ全体の行事でもある「クリスマス」を指すからである。ヨーロッパでは、クリスマスの前後、店などが全て休みになるくらい当然のこととして浸透している。日本では「お正月」特に昔の正月三が日のような感覚ではないだろうかと考え、出来る限りクリスマスのイメージがドイツの観客につかないような訳、そして口頭解説の際には、日本の星空の写真を見せたりして視覚的なものも用いた。

本研究に関する演奏会で〈聖夜〉の演奏をする場合は、中山の曲を用いたが、実は、同じ詩を用いて、1933年に弘田龍太郎が作曲している。弘田の曲は中山

に比べると今回の問題となったキリスト教の行事を思わせるような旋律はついていない。実に良く当時の日本の夜空を表していると感じる。弘田の曲を演奏するならば、中山の曲に比べると、ドイツの観客もイメージと捉えやすかったかもしれない。しかし、それでは、訳詩を作成するという点において逆に旋律や和音が邪魔をしてしまうためこれまでの研究演奏会には演奏しなかったことをここに申し添えておきたい。

第4曲目は〈やさしさにであったら〉である。この曲は、仏教婦人会創立150年記念の公募作品から選ばれた詩に湯山昭が曲をつけ、1982年に発表された。作詞の久井は青春時代を戦争の中で過ごしたわが人生を振り返り、詩の最後に「生かされて　生きてゆく日々」と綴ったのではないかと考え、訳を作成した。

やさしさにであったら	Wenn du auf einen lieben Menschen triffst
1．やさしさに　であったら	1. Wenn du auf einen lieben Menschen triffst,
よろこびを　分けてあげよう	Teile die Freude mit dem anderen!
しあわせと　おもったら	Wenn du für ein Glück es ansiehst,
ほほえみを　かわしていこう	Tausche ein Lächeln mit dem anderen —
海をふく　風のように	so wie der Wind, der über das Meer geht:
さわやかな　おもいそえて	Mit einer frischen Brise, die vom Herzen kommt!

2．さびしさを　かんじたら	2. Wenn Einsamkeit dich überkommt,
だれかに　声をかけよう	Rede einen Menschen an!
ふれあいを　たいせつに	Das Miteinander schätze hoch,
語りあう　友をつくろう	zum Gespräche suche dir die Freunde!
花の輪を　つなぐように	Wie wir Blumenkränze ineinander flechten,
とりどりの　おもいつないで	so verknüpft die Vielfalt all der Gedanken!
3．くるしみに　であったら	3. Wenn dich ein Leiden einmal heimsucht,
ひたすらに　たえていこう	Dann nimm es hin mit viel Geduld!
合わす掌の　ぬくもりに	Falte die Hände, daß du dich wärmst
ほのぼのと　やすらぐこころ	und still und leise Friede einkehrt im Herzen.
かぎりない　ひかりのなかに	Grenzenlos ist das Licht, in dem uns
生かされて　生きてゆく日々	das Leben gegeben ist und wir leben, Tag für Tag.

本曲は第１曲の〈ありがとう〉と同じように、題目を訳するのに問題が生じた。というのは、「やさしさ」は形容動詞であるので、形容動詞に「出会う」のはドイツ語として文法的に成り立たない。そこで、ドイツ語訳には、波線の

ようにその行動の中心となる人称の単語を補った。また、下線はどのような状態に「出会う」のかを補い、二重下線自分の想いを「添える」だけでは想いが弱い印象を受けるため、「自分の中から湧き上がってきた想い」という単語を補った。本詩もドイツ語を日本語に直訳すると次のようになる。

もしあなたが親切な人にであったら

1．もしあなたが親切な人にであったら
その喜びを他のみんなに分けてあげましょう
もしあなたが幸せを感じたら
他のみなと笑顔を交わし合いましょう
海面を行く風のように
その新鮮な微風は私の心から湧き上がってくるんだわ

2．もしあなたが寂しいとかんじたら
人と話しましょう
人との触れ合いを宝物に
語りあえる友人を探しましょう
私たちは花の環のようにつながりましょう
様々な考え方がきっと一つになるでしょう

3．もしあなたが苦しみを感じたら
そうしたら我慢をして受け入れましょう
あたたかな心を感じるために　手をあわせて祈りましょう
そうすれば心の平安がおとずれ、心が安らぐでしょう
限りのない光に私たちはいのちを受けこれからも毎日生きていく。

と前述のように日本語歌詞と違っているが、文化や宗教以前に言語自体の持つ文法のあり方や、日本語独自の成り立ちに関する問題が明らかとなった。

第５曲目は、〈太陽からの手紙〉である。この曲は、京都女子大学女声合唱団がハワイへ演奏記念旅行へ行った1991年に発表され、同時に合唱団の手で英語翻訳がおこなわれた。作詞は原　真弓、作曲は吉川　忠英である。本曲は、これまで紹介してきた曲に比べると新しく、詩の言葉の進行も万葉リズムなど用いない現代風である。

本詩の翻訳については、これまでの詩と違って表だって「仏」などの言葉が出てこないことや「世界平和」が願われているという仏教の教えを大きく捉えた詩だということである。また旋律と言葉のあり方においてもメリスマは使用されず、これまでの「日本的」とされている要素は大変少ない。

太陽からの手紙	Brief von der Sonne
１．大地へ届く　太陽の手紙	1. An kunft au der Erde, Ein Brief von der Sonne
生まれてきたことを讃えてる	Das Lob meiner Geburt
何も恐れず　何も迷わずに	Ich habe vor nichts Angst, zweifle nie
私らしく今日を歩きたい	Ich möcht vorwärts gehen, wie es mir ziemt
世界中の夢が咲くために	Fuer die Erfuellung der Träume dieser Welt
空はあんなに広がってゆく	Der Himmel öfnet sich so weit
この心同じように	genau wie die Sinne
限りなく豊かになる	Reich und grenzenlos
やさしさあふれる時	Guetige Herzen fließen über
２．　風からとどく　明日への手紙	2. Ein Brief von Wind für morgen

さわやかな自由を歌ってる	Singend in erquickender ungezwungenheit
過ぎ行く季節　移りゆく時代	Die Jahreszeiten vergehen, Die Ären ebenso
私らしく今日を歩きたい	Ich möcht vorwaerts gehen, wie es mir ziemt
世界中の慈愛（あい）が咲く時に	Wenn die Liebe erblüht auf dieser Welt
海は今より輝くだろう	Erglänzen die Meere mehr denn je
この生命見守られて	Die Seelen beschützen
限りなく奇麗になる	Grenzenlose Schoenheit
やさしくほほえむ時	Wenn ich sanft lächle
世界中の夢が咲くために	Fuer die Erfuellung der Träume dieser Welt
空はあんなに広がってゆく	Der Himmel öfnet sich so weit
この心同じように	genau wie die Sinne
限りなく豊かになる	Reich und grenzenlos
やさしさあふれる時	Guetige Herzen fließen über

本詩は、先にも述べたが、「仏」やはっきりと「仏教」を思わせる言葉自体が出てこず、読む人、聴く人、そして演奏する人によって自由な解釈が成り立つようになっている。

また、この曲は、ニ長調 4 分の 4 拍子と親しみやすく前奏も弱起で高音で軽やかに始まり、歌い始める前は低音で落ち着いたリズムを奏でる。本曲は、女声二部合唱であるが、歌唱が斉唱で始まる。そして徐々に展開部である「世界中の…」に向かって盛り上がりを見せる。本曲は旋律の運びも和音構成も仏教的

なものや日本をおもわせるような要素はなく現代においては、一般的に普及しやすいと言えよう。しかし、ドイツ語で訳詞を作成するにあたっては、第4曲と同じように形容動詞が多く出てきており、主語はどこにあるのかということを探るにあたって日本語の詩は不確定なものが多く、ドイツ語の文章を作成するのに大変な時間を要した。

2．讃美歌について

1）布教活動と教育のための讃美歌

歴史

まず、キリスト教の歴史と教育について概観したい。

西洋の歴史、殊更宗教の歴史は、15世紀半ばから16世紀半ばまで遡らねばならない。また、第15世紀半ばから第16世紀半ばに跨る約一世紀のルネッサンス・宗教改革の時代は、中世期から近世紀に連なる歴史的連関を中断して截然と両時期に二分する接線でもあった。（石原, 1972）と言われているが、時期を同じくして、一般教育の発展も顕著に現れている。このような宗教における改革は14世紀に既にあったギリシャ、ローマ古典時代の理想や価値観の再生を目指したが、その発展の中で再生ではなく、神中心時代からの脱出、［自由］が目指された。当時は、伝統よりもその源となる聖書再重要視したこと、古代教会の教義を尊重研究したこと、宗教を実際的倫理的なものと考えたことはその貢献であった。（魚木, 1951）

宗教改革運動の始まりはルネサンスと同時代に存在したが、宗教改革は本来中世紀以来の教会そのものを根本的に破棄して、教会以前の純粋なキリスト教、新約聖書とそれに続く初代教父に固有な福音信仰に帰ろうとする運動なのである。（石原, 1972）

など言われており、宗教改革の流れと、当時のヨーロッパ社会が政治、経済など様々な事情と相まって盛んになった。

いわゆる宗教改革はローマ・カトリック教会の改革の試みであるが、時期と

知識を持ち合わせて現れたのが、マルティン・ルター（Martin Luter, 1483-1546）（以下ルター）である。ルターは独自の教育観を持っており、教会での教育はまず家庭へ繋がり、そこから学校に広がっていくと考えていた。ルターによれば、家庭は将来の市民と神の僕を養育する場で、国家や教育の新手に根源的な役割を有していると考えており、「家庭がすべての教育の核であった。両親はこの世の権威でもあれば、霊的権威でもあった。しかし、ルターは学校を見過ごしにしてしまったのではない。」（徳善, 1963）とも言われ、家庭での教育あってこそ、それらが教会での教育につながり、更に学校での教育が成り立つという考え方であった。

ルターは当時の宗教家たちに満足せず教会のあり方などをヴィッテンベルグ城教会の門扉に「95か条の提題」を張り出し、魂の救済を免罪符など金銭で売買するローマ教皇庁に公然と抗議し、宗教改革の烽火をあげた。

この改革運動は全ヨーロッパに広まりカトリック教会に対してプロテスタント派として現在に至っている。ルターの「聖書のみ」（聖書のみに忠実な教会）、「信仰のみ」（純粋な信仰のみによる内的救済）、「万人祭司」（神の前での平等）の主張は、宗教改革の３大原理として全てのプロテスタント教会の共有財産となって今も世界遺産としてヴィッテンベルクにあり、多くの人々も目にすることが出来る。

また、ルターは聖書をドイツ語である母国語で読むことが一般の人にも出来るように、1522年ヴァルトブルグ城（ドイツ/チューリンゲン州アイゼナッハ）で新約聖書をギリシャ語から翻訳し、1534年には新旧約聖書のドイツ語訳を完成させた。ルターはまた、讃美歌を牧師と聖歌隊だけでなく、会衆全員が歌えるように改革し、自身でも多くの讃美歌を作り聖歌集を編纂している。卓上談話の中に、「音楽は神の美しい素晴らしい賜で、神学に近い。」と話し、「讃美歌をよく歌い、神の喜びとなることはどのキリスト者にも隠れなきことであると思う。……しかり、聖パウロも……」と書いている。本談話が良く表れている讃美歌《いずこの家にも》（《Vom Himmel hoch》）については次節で詳し

く述べるが、ルターはこのように、何においても「聖書に忠実に教会を保ち、教会は、一般市民にも開かれ、聖書の言葉は、自分で触れ合うことの出来るものでなければならない」と言う考えを強く持っていた。

2）音楽について

まず、ヨーロッパでの声楽の歴史を概観したい。

声楽（歌うこと）が生まれたのは、主に、9世紀から10世紀にかけて西欧で発展し改変されながら伝承してきた。記譜法は現在の五線紙ではなく、ネウマ譜として用いられ、16世紀くらいにようやく五線紙の楽譜が生まれている。また、グレゴリオ聖歌は、ミサや聖務の日課として歌われていたため、教会においては、男声もしくは少年合唱によって、修道院では修道僧もしくは修道女によって歌われてきた。当時は聖書にある言葉そのままをラテン語で歌うというよりは唱えるように、「神の言葉」として奏された。その後キリスト教の広まりと同じくして、 徐々に一般市民にもわかる言葉へと変わり、単旋律のみでなく、多旋律、和音が付き始めた。また、女性も音楽のなかで役割を得るようになり、混声での演奏が可能となった。

声楽としてはこのような歴史があるが、讃美歌においては、ルターの考え方から言うと、決して特別な合唱団などに所属している者が歌うようなものでなく、家で親が子に歌ってやったり、家族で集まった時に共に歌ったりするようなもっと簡単で、聖書の内容を簡潔に表しているものでなければならなかった。そこでルター自らも讃美歌を作り、編集へも携わり現在の讃美歌集が出来上がった。

次に讃美歌の歌詞の内容と訳の詳細を述べていきたい。また、聖書の中の言葉あるいは物語の流れと讃美歌の歌詞がどのように一致しているかも検討していく。

第１曲目

よろこべや（130）

１.よろこべや、たたえよや、
　シオンの娘、主の民よ。
　今しきますあまつきみ、
　今しきます平和の主。
　よろこべや、たたえよや、
　シオンの娘、主の民よ。

２.さちあれや、主の民に、
　ホサナ、ホサナ、ダビデの子。
　今ぞきたる神の国。
　今ぞ成れる主のちかい。
　さちあれや、主の民に、
　ホサナ、ホサナ、ダビデの子。

３．むかえよや、さかえの主、
　ホサナ、ホサナ、ダビデの子
　平和の御座、ゆるぎなく、
　めぐみの御代かぎりなし。
　むかえよや、さかえの主、
　ホサナ、ホサナ、ダビデの子。

(F.ハインリッヒ・ランケ、1820、1826)

Tochter Zion(13)

1. Tochter Zion freue dich,
　Jauchze laut, Jerusalem!
　Sieh dein König kommt zu dir,
　Ja　er kommt, der Friedefürst.
　Tochter Zion, freue dich,
　Jauchze laut, Jerusalem!

2. Hosianna, Davids Sohn,
　Sei gesegnet deinem Volk!
　Gründe nun dein ewig Reich,
　Hosianna in der Höh!
　Hosianna, Davids Sohn,
　Sei gesegnet deinem Volk!

3. Hosianna, Davids Sohn,
　Sei gegrüßet, König mild!
　Ewig steht dein Friedensthron,
　du, des ewgen Vaters Kind.
　Hoseanna, Davids Sohn,
　Sei gegrüßet, König mild!

(F.Heinrich Ranke,1820,1826)

本讃美歌は、(　) 内にあるように日本で編集された讃美歌集には、130番として載っており、ドイツの讃美歌集では、13番と番号が違っているが、上掲のように詩の内容は凡そ一致する。

また本讃美歌は、Händel（Georg　Friedrich　Händel　1685-1759）のオ

ラトリオ“ユーダス・マッカベーウス”の第３部にある歓喜の大合唱行進曲「See the Conquering Hero Comes」を讃美歌用に編曲したドイツの宗教的民謡（Geistliches Volkslied）で比較的新しいもの（恐らく19世紀ごろ）とされドイツの教会でひろく歌われている曲である。日本では、元々のオラトリオ名に「歓喜の大合唱行進曲」という名が入っているからか、運動会などの表彰式に使用されたりする。

さて次に聖書の中にはどのような物語が載っているのかということを記しておきたい。

マタイによる福音書第21章９節～11節

9．そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も共に叫び続けた、
「ダビデの子に、ホサナ。
主の御名によって着たる者に、祝福あれ。
いと高き所に、ホサナ」。

10．イエスがエルサレムに入っていかれたとき、町中がこぞって騒ぎ立ち、
「これは、いったい、どなただろう」と言った。

11．そこで群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである」と言った。

Mattaeus 21.Kapitel-9～10

9．Die Scharen die vorausgingen und nachfolgten,riefen: » Hosanna dem Sohn Davids!Gepriesen sei,der da kommt im Namen des Herrn! Hosanna in der Höhe!«

10．Und als er in Jerusalem einzog, kam die ganze Stadt in Bewegung, und man fragte: » Wer ist dieser?«

11．Die Scharen aber riefen: » Das ist Jesus,der Prophet aus Nazaret in Galiläa.«

と言うように、新約聖書マタイによる福音書の中でイエス・キリストが十字架につけられ復活するためにエルサレムに迎えられる場面で「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」と群衆が叫ぶ場面である。

ここで、もう一度讃美歌の言葉と旋律へ目を向けてみたい。
マタイによる福音書にある本場面は、イエス・キリストの十字架からの復活というキリスト教において最重要であり、希望に満ちた喜ばしい場面である。
１番の歌詞から順にみていくと、その「希望」や「喜び」を表す単語「freue」、「Jauchze」にあてられた旋律は、16分音符で細かくリズムを刻みながら音程は上行する。また、待ちわびた「(すいくい)主」を表す単語「König」にはゆったりとした安心感が与えられるように２分音符で下行音程をつけている。次に、「平和の主」を表す単語「Friedefürst」にあてられた旋律は、「これでようやく我々に本当の意味での自由が訪れる」という希望の意も込められ、ターンを用いなおかつ実に２小節も使用して１つの言葉を表している。このことによって群衆の高まった興奮や平和の主に対する期待感など歌唱する者も、聴く者も同時に味わえるようである。
その後最初の２行を繰り返し、２番へと進む。

２番の歌詞は、旋律は同じであるが、１番は平和の主の誕生に対し、希望や期待感を表していたが、ここでは、その希望や期待が具体的な「神の国」「主のちかい」として具体的に表れている。ドイツ語では、それらが「ewig Reich」＝永遠の国　であったり、「Höh!」＝最上の喜びを表す言葉に替わり最後の２行を繰り返す。

３番の歌詞も旋律は同じで、3－4行目の展開部では「ewig」＝永遠の「Fried ensthron」＝平和の主「Vaters Kind」＝神の子　と言うようにエルサレムに復活のために現れたイエス・キリストを群衆が受け入れ、平和の主、神の子として希望をもって受け入れていく様子が表されていることがわかる。

第２曲目

いずこの家にも（101）

１．「いずこの家にも　めでたき音ずれ
伝うるためとて　天よりくだりぬ。

２．マリヤの御子なる　小さきイエスこそ、
み国にこの世に　つきせぬ喜び。

３．神なるイエスこそ　罪とがきよむる
きずなき小羊、救いの君なれ」。

4.「よくこそましけれ　貴きイエス君、
いかなる物もて　君をばもてなさん

５．こころの臥所の　塵をば払いぬ、

Vom Himmel hoch(24)

1. Vom Himmel hoch, da komm ich her,
Ich bring euch gute neue Mär,
Der gute Mär bring ich so viel,
Davon ich singn und sagen will.

2. Euch ist ein Kindlein heut geborn
Von einer Jungfrau auserkorn,
Ein Kindelein so zart und fein,
Das soll eu’r Freud und Wonne sein.

3. Es ist der Herr Christ, unser Gott,
Der will euch führn aus aller Not,
Er will eu’r Heiland selber sein,
von allen Sünden Machen rein

4. Er bringt euch alle Seligkeit,
Die Gott der vater hat bereit,
Dass ihr mit uns im Himmelreich
Sollt leben nun und ewiglich

5. So market nun das Zeichen recht:
Die Krippe, Windelein so schle-

	cht,
愛するイエス君　静かにいねませ。	Da findet ihr das Kind gelegt,
	Das alle Welt erhält und trägt.
（マルティン・ルター、1535）	（Martin Luther, 1535）

本賛美歌は、ルターがクリスマスのために作ったものだと言われている。ルターがどのような考えを持った人物であったかは、前述の通りであるが、神に、キリストに最も感謝し、讃美する気持ちを表した曲であると言える。ただ、旋律においては、ルターの原作ではなく、ラテン語讃美歌やドイツ宗教歌、民謡などから取材され作曲されたと言われている。ルターが本詩を作るに際し取り出した聖書の箇所は次の通りである。

コロサイ人への手紙第３章16節-17節

16．キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互いに教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい。

17．そして、あなたのすることはすべて、言葉によるとわざによるとを問わず、いっさい主イエスの名によってなし、彼によって父なる神に感謝しなさい。

コリント人への第一の手紙第14章15節

15．すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう。

Kolosser 3.Kapitel 16-17

16．Das Wort Christi wohne in seiner Fülle unter euch ：lehrt und mahnt einander un aller Weisheit, und singt voll Dankin euren Herzen Gott Psalmen,Hymnen und geistliche Lieder.

17．Alles, was ihr tut, in Wort oder Werk, das tut alles im Namen des

Herren Jesus und sagt Gott, dem Vater, Dankdurch ihn!

1 korinther 14.Kapitel 15

15. Was folgt daraus? Beten will ich mit dem Geist, beten aber auch mit dem Verstand, lobsingen will ich mit dem Geist, lobsingen aber auch mit dem Verstand.

このように本詩については聖書そのままの言葉が歌詞になっているわけではなく、より端的に一般の者にもわかりやすくなっているのがわかる。聖書の言葉はルターがラテン語からドイツ語へ翻訳をしたことにより一般の人々も自分で読むことが可能となり、決して読むのに困難なものではない。日本人にとっても日本語に翻訳されているために言葉として読むには何ら困難はないが、この文章を理解し、普段の生活で暗記して実行しようとなると決して簡単なことではない。ルターがこの聖書の箇所にラテン語讃美歌やドイツの民謡を旋律に用いることにより、ラテン語聖書の原点を外れることなく、ドイツ人がドイツ民謡を歌うような感覚で口ずさめる歌となった。このことは、前述した「音楽は神の美しい賜物で、神学に近い」という言葉を実行した１曲であると言えよう。

３．まとめ

これまで数年間の研究を基に新たな視点を加えて仏教讃歌とドイツ語の讃美歌の成り立ちを概観し、具体的に歌詞や旋律についてみてきた。

仏教讃歌と讃美歌（ドイツ語讃美歌）の違いは大きく次の2つが挙げられる。

①仏教讃歌の歌詞は詩として独立しているものに曲が付けられていること。讃美歌は仏教讃歌のように独立した詩に特に仏教の素養のあるものが作曲をしたものではなく、聖書を基にして一般市民にもよりわかりやすく詩にして旋律をつけたものである。

②それぞれの国や文化の成り立ちからくる人々の宗教観や家族観、そして死に

対する考え方。

大きくは上記の2点が挙げられ、ここ数年間、仏教讃歌のドイツ語訳を作成し、解説を加えた演奏会をドイツの教会で開催することで、日本語だけ見ていたら見過ごしてしまったであろう日本語としての意味や、仏教の歴史を背負った深い意味など明らかとなった。仏教讃歌を演奏者として演奏する場合、他の芸術楽曲と同じようにその歴史、作曲者、作詞者の意図の読み取りからの解釈、その上に演奏者としての自己演奏表現をしていくべきことがはっきりとわかった。

また、同じく讃美歌においても、ドイツ語から日本語を検討したり、聖書の中にある物語を追っていくと、「礼拝堂でただ何となく歌われているもの」なのではなく、そこには先人の強い想い、また聖書の中の教えがしっかりと込められていることが意識出来た。

この世にいずれの讃歌にも長い歴史と先人たちの想いを受けているからこそ国を越え、数世紀に渡って受け継がれているのであろう。

演奏会という普段は一方的な表現活動の場であるが、同じように「生きて」いる人間であり、それぞれの人生のたったひとりの表現者であるという事を胸に、今後も研究を重ね、演奏活動へとつなげていきたい。

謝辞

演奏協力を惜しみなくしてくださるテノール歌手の竹内公一氏、ピアノ伴奏者として旋律と和音の関係などに至ってもご助言くださるピアニストの土居知子氏、仏教讃歌の日本語詩からドイツ語へ訳詞の作成、言葉の精査など様々な助言を下さる関西学院大学名誉教授 Detlev Schaubecker 氏、他宗教にも関わらず歴史あるキリスト教教会で演奏をお許し下さり、研究にご協力くださる牧師 Herr Ronard Kleinert, Herr Gerhard Reuther, 音楽家 Herr Rolf-Udo Kober, Frau Irina Wachtel 皆様へこの場をかりて心より感謝申し上げます。

文献

・「年間連続調査・日本人（6）宗教観」　読売新聞アンケート　2008年5月17－18日実施
・山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター1998年
・石原謙「キリスト教の展開-ヨーロッパ・キリスト教史下巻-」
岩波書店　1972年　p.243
・魚木忠一“後偏　プロテスタント基督教思想史”「基督教思想史」教文館　1951年
p.127
・徳善義和”ルターの教育観理解の変遷”神学季刊　1963年　p.49
・日本聖書協会『聖書』1986年（新約　1954年　旧約　1955年）
・Prof.Dr.V. HAMP，Prof.Dr.M.STENZEL,Prof.Dr.J.KÜRZINGER『DIE HEILIGE SCHRIFT der Alten und Neuen Testamentes』1962
・ガハプカ奈美・竹内公一「仏教讃歌の独語訳作成とその演奏」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』27 pp.19－33　2014年
・ガハプカ奈美・土居知子・竹内公一「仏教讃歌と讃美歌の比較と演奏」～歌詞を中心に～京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』28　pp.17－42　2015年
・若林明彦「日本人の習合主義的宗教観の再考－道教、儒教、仏教を日本の宗教的基層に浸透させたものは何か－　千葉商科大学紀要49（2）pp.119－133　2012年
・安達寿孝「宗教改革者・ルターの庶民の子どもに対する教育論―家庭教育を中心に―金城学院大学論集人間科学編（9）pp.1－14　1984年
・坂東性純『親鸞和讃』信心をうたう　日本放送出版協会（NHK 出版）2010年

〈キーワード〉

仏教讃歌　讃美歌　演奏　ドイツ語